

JOHN TIMOTHY WIXTED "POEMS ON POETRY"

("LITERARY CRITICISM BY YUAN HAO-WEN")

MÜNCHENER OSTASIATISCHE STUDIEN BAND 33

FRANZ STEINER VERLAG GMBH Wiesbaden 1982

J・T・ウィクステッド 譯註 元好問『論詩絕句』

『ミュンヘン東アジア研究叢書』第33冊

一九八二年 四八二頁

文業の出發點にあつてまず詩論を世に問うた詩人とは、一體いかなる詩人だったろう。そういう詩人は、少なくとも中國には多くない。すぐれた詩人は同時にすぐれた批評家でもあるべきだから、確乎たる詩論を有すこと自體に、もちろん疑問があるわけではない。ただ、そのことと、詩論を世に問うこと、それも出發點に於いて行なうことは、恐らく全く別の問題であろう。なぜなら、詩論をおおやけにすることは、自身の理想を示すことのみならず、世の詩觀をも正すことだからである。

元好問が「論詩三十首」を書いたのは二十八歳の折であ

る。それはちょうど、彼が金末の文壇に登場し、金朝詩の總決算としての道を歩みだそうとした頃でもあった。彼は、文業のほば出發點にあつて詩論を世に問うた、中國でも稀な詩人であつたが、彼の文學全體にも、この一事に象徴される一つの顯著な特徴がある。それはなにより、彼が極めて意識的な記述者だつたことである。彼は鋭敏な自意識の持ち主であつた。しかもその自意識は、自己を顯在化させるのではなく、傳統の中に自己を埋没させ、自身の姿を傳統や時代によって隱蔽してしまおうとする自意識であつた。遺山は、「聶元吉墓誌銘」（文集卷二十二）という文章の中で自身の性格を分析し、「予は則ち矯枉過直、率ね己を屈して以て物に徇^{したが}う」と記述しているが、この「己を屈して以て物に徇う」とは、單に彼の性格のみならず、傳統の總體や世間の目を過剰に意識した彼の文學全體にもあてはめ得る特徴の一つなのである。彼の文學の難しさはこの點にある。彼は、讀者に對し細心の注意をはらつた記述者である。彼はなかなか本心をあかさない。そして、「論詩三十首」も決してその例外ではないだろう。

書評

この作品は、青年らしい攻撃性や瑞々しい才氣煥發が横溢してよい時期に書かれたものである。にもかかわらず、彼はそれをしなかつた。攻撃性や才氣煥發を露にすることは、彼の自意識が許さなかつたのである。遺山は、「小亭集引」（文集卷三十六）という文章の中で、初學の折の自戒十數箇條を列して「讐敵謗傷を爲すなかれ……正人端士の道わざる所を爲すなかれ」と記述しているが、これが彼の自意識のあり方でもあつた。「論詩三十首」一首一首の論點が時に不明瞭なのは、第一にこの點に原因があるだろう。彼は恐らく、滿々たる野心と攻撃的な意圖をもってこの作品を書いた筈である。でなければ、一體どんな詩人が文業の出發點にあつて詩論をおおやけにする必要があつただろう。ただ彼は、傳統的な議論を展開することによってそれを巧みにカムフラージュする老獪さを已に備えていたのである。遺山に對し、愛情と裏腹な複雑な思ひを禁じ得ないのは恐らく私だけではあるまいが、私はこの作品に、遺山の心奥の暗い陰翳を見るような氣がして、實はあまり愛着を感じない。だが、それでもこの連作に何らかの興味を感

じるとすれば、それはこの作品が、攻撃的な意圖を恐らく秘めていたがゆえに、金末の文學狀況を何がしか傳えると考ええるからなのである。そして、JOHN TIMOTHY WICKED氏による“POEMS ON POETRY”に、もし缺點があるとすれば正にこの點ではあるまいか。氏は、金朝文學の證言者という視點をこの作品の解釋に全くあてはめていない。遺山が意圖したように、傳統の本流からしかこの作品を見ていないのである。私からすれば、それは遺山の術數にはまったことになる。

本書は、「ミューン・ヘン東アジア研究叢書」第三十三冊として刊行された、元好問「論詩絕句三十首」の恐らく最も長大な注釋書である。前言・本論・註・索引・遺山の略傳・引用原文一覽・その他二三の小論を含め、五百頁にもわたる意欲作で、しかもそれら付録にいたるまで氏の誠實さがいきとどいたなかなかの好著である。關係分野の研究者には一讀をお奨めしたい。ただ私には、前述の弱點が惜しまれてならない。

この點についての氏の立場は、次の言葉に要約されるだ

ろう。

問題を複雑にしているのは、元好問がこの「論詩三十首」を、おおよけの議論のためでなく、個人的な理由によつて書かなければならなかったと思われる點である。この力作を彼が同時代人に示したという證據はここにもないのである。(前言、17頁)

だが、氏のこの意見はいかなるものであろう。もし遺山がこの作品を篋底に納め、終生世に問うことをしなかったとすれば、第三十首にいう

撼樹蚍蜉自覺狂 樹を撼^ゆがす蚍蜉 自ら狂を覺ゆ

書生技癢愛論量 書生の技癢 論量を愛す

という辯解は、少なくとも全く無意味になる。それに、この作品には「丁丑の歲、三郷の作」とか、「柳子厚は管の謝靈運、陶淵明は唐の白樂天」といった原註が數箇所付されているが、この原註は、一體誰が何のために付けたというのだらう。「論詩三十首」のこうした原註が遺山自身の手になるという確證はもちろんないが、ただ、『遺山先生文集』に付された原註を仔細に検討し、「初挈家還讀書

「山雜詩」に「繫舟は先大夫讀書の所」・「賦瓶中雜花詩」に「予は未開の杏花を絶愛す」といった註があることを考慮するならば、「論詩三十首」の原註も恐らくは彼自身の手になると考えてよからう。「丁丑の歳」にこの作品がおおやけにされなかったとしても、遺山が讀者を予想し、若書きの習作であることを故意に印象づけ、論點の不明瞭な詩に自註を付けたこと、疑問の餘地はない。遺山ほど意識的な記述者が、おおやけにするつもりのない詩稿を死後にまで残したとは考え難いし、詩論とは本来、自分自身のためだけに書くものでもないだろう。

しかもこの作品は、同時代の議論といくつかの重複點をもつ。その最も重要なものは、この作品が、當時行なわれた「變古」と「近古」の論を背景にもつことであるが、そればかりか、『歸潛志』卷八にいう

およそ作詩は和韻を難しと爲す。……嘗て雷希顔・元裕之と詩を論ず。元云わく「和韻は古にあらず、爲すこと勉強たるを要す」と。……

とは、すでに小栗英一氏の指摘があるように、「論詩三十

首」第二十一首と同様の論を展開するものである。和韻にかかわる問題が當時の關心事であったことは、このほか王若虛『滄南詩話』卷中の

才識東坡の如きも、亦た波蕩してこれに従うを免れず。集中の次韻は三の一に幾し。……蘇公をしてこれ無からしめば、その古人を去ること何ぞ遠からんや。

という記述によっても確認できる筈である。

また、第二十四首は、氏も指摘される通り、遺山の師の一人王中立の意見をそのまま用いたものである。③また、第十四首は、『滄南遺老集』卷二十七の次の記述と、恐らく揆を一にするものであった。

管寧・華歆、共に園菜を鋤す。地に金あるを見る。寧は鋤を揮いて瓦石と異ならず。歆は捉えてこれを擲つ。世はみな寧を優とし歆を劣とす。予、謂えらく、心術を以てこれを觀れば、固より世の論ずる所の如し。その人情に近からず、物理を盡さざるに至りては、則ち相い去ること亦た幾も無し。畢竟、金玉と瓦石と、豈に別かるる無き者ならんや。……

また、第二十七首にいう

諱學金陵猶有說 金陵（王安石）を學ぶを諱むは猶お説

有り

竟將何罪廢歐梅

竟に何の罪を將て 歐梅（歐陽修・梅堯臣）を廢するや

も、新法黨を忌避し、歐陽修・梅堯臣の詩を無視し續けた同時代人に向けての言ではなかったろうか。こうした事柄は、遺山が同時代の意見を参照したことばかりでなく、同時代に對し極めて意識的に議論を展開したことを意味する筈だが、氏は、第二十一首や第十四首の解釋において、それら同時代的背景を知っているにもかかわらず、恐らく故意に省略しているのである。同時代の動向を見定めた後に

無關係と判斷するのならまだしも、はじめから論及していないのは一體どうしたわけだろう。文學史全體を俯瞰しながら、議論の淵源をさぐりその來歴をたどることによって、「論詩三十首」を文學批評史の正統に位置づけようとする氏の努力はわからぬでないが、この作品を正確に讀む上で、同時代的背景が無視し得ないこと、他の作家と何ら變りな

い。それどころか、元好問は研究の特に立ち遅れた金朝という時代に生まれた作家である。そのため、そうした背景についての考察がこれまであまりに等閑に付されてきたのである。翁方綱・宗廷輔・郭紹虞等の注釋がすでに備わった今日の我々が注目すべきは、まずその點ではあるまいか。

その上遺山は、今日我々に伝えられた金朝文學のほとんどすべてを檢閲した、金朝全體の巨大な證言者でもあった。

彼の文學と同時代のかかわりを検討することは、現存する金朝文學の性格を知る上でも、重要な作業の一つなのである。氏がこの點への配慮を全くおこなっているのは意外であり、また残念でならない。

氏の議論の特徴は、すでに述べたように、議論の淵源をさぐり、その正脈をたどることによって、「論詩三十首」の各首を文學批評史の正統に位置づけることである。そこに示された氏の博學には敬服のほかないが、若干の問題を感じないわけではない。それは、各語彙の用例をさぐり、先人の様々な解釋を紹介し、その後に自説を歸納するという極めて堅實な方法を氏が採用するにもかかわらず、そうし

た作業の結果、遺山の語彙の眞の意味や連作全體の流れが正確に捉えられたとは、必ずしも思えないからである。

たとえば、遺山が李商隱に論及した次の三首をみてみよう。

○第三首

鄴下風流在晉多

鄴下の風流 晉に在りて多し

壯懷猶見缺壺歌

壯懷 猶お「缺壺歌」に見る

風雲若恨張華少

風雲 若し張華に少なきを恨まば

溫李新聲奈爾何

溫李の新聲 爾を奈何せん

○第十二首

望帝春心托杜鵑

望帝の春心 杜鵑に托し

佳人錦瑟怨華年

佳人 錦瑟に華年を怨む

詩家總愛西崑好

詩家 總て西崑の好しきを愛す

獨恨無人作鄭箋

獨だ恨む 人の鄭箋を作す無きを

○第二十八首

古雅難將子美親

古雅 子美の親しきを將り難し

精純全失義山眞

精純 全く義山の眞を失なう

論詩寧下涪翁拜

論詩は寧ろ涪翁に下りて拜さん

書評

未作江西社裏人 未だ江西社裏の人とは作らじ

この三首についての氏の解釋は次のようなものである。

まず第三首。

遺山が晉詩を評價したのは、建安の詩精神を繼承したからである。もっとも、晉詩はある程度の「兒女の情」(sentimentalism, love and romantic emotions)をもっているが、といって晩唐のそれほど明瞭なものでもない、と遺山は考えたのである。これまで見落されてきた重要な點は、遺山が、「壯懷」や「風雲の氣」(heroic spirit)だけを詩の主題と考えたのではないという點である。遺山は、「兒女の情」を詩に不適切な素材と考えたのではない。そうした感情の表出は極端な方向に容易にむかい、そうなれば「壯懷」ほどに人を高揚させるものではあるまいが、といって、詩の重要な主題の一つであることにはかわりはないのである。

(46頁)

第十二首

遺山はここで、相互に關連しあう二つのことを述べて

いる。第一に、李商隱の詩は極めて特殊なものであり、それをより深く鑑賞するためには「鄭箋」が必要だということ、第二に、李商隱の詩に「鄭箋」が必要だとすれば、それは彼の詩の不完全さ・曖昧さを物語るということ、の二つである。ただ、だからといって遺山が彼の詩に評價を與えなかったかといえば、そうではない。遺山は、李商隱の詩が「精純」・「眞」という言葉で要約できるすぐれた作品であること、また、彼の模倣者が「精純」・「眞」を繼承できなかったことを、第二十八首で述べているのである。(106頁)

第二十八首

「古雅」とは antique or classic elegance or correctness の意で、この語を用いて杜甫に近づくことの難しさが説かれている。また、李商隱は「精純」(refined purity) という表現で記述されているが、この「精純」の用例としては、『列女傳』・「貞順傳」・「顔氏家訓」・「謝偃」・「高松賦」などを挙げることができる。(209頁)

(ここに示した譯のすべては、氏の意をくんでの意譯である。)

これらの解釋は、それぞれをみるならば、みなあり得べき解釋かもしれない。だが私には、第三首に於いて遺山が「兒女の情」を是認したとは思えないし、また、第二十八首「精純」の語注も必ずしも充分なものでなく、むしろ、語注が必要なのは「古雅」の方でなかったかと思うのである。「兒女」とは、謂うまでもなく「おんなこども」の謂だが、「兒女の態を爲して、憔悴して賤貧を悲しむことなかれ」(「北極贈李觀」と韓愈が李觀に宛てたように、この語は本来、中國の傳統文學ではよい意味に用いられるものではない。遺山が李商隱を評價したのは、彼の詩が「兒女の情」に見えながら、實はそうでないからであろう。でなければ、なにゆえ「鄭箋」が必要となろうか。また、「古雅」にしても、これは單に古典的という意味でなく、恐らく「漢謠魏什」(第一首)・ないし『詩經』風雅の世界を指したに違いない。しかもこの三首は、遺山の李商隱觀のみならず、「論詩三十首」全體の流れを把握する上で、極

めて大きな役割を果すものである。

私見を述べて敢て氏に異議を提出するならば、ここには遺山の歴史觀にも關與する重要な問題が含まれる。

遺山が李商隱を極めて高く評價したことは、第二十八首の「精純」という語に明らかであるが、この「精純」という語については、まず何より、第二十六首

金入洪爐不厭頻

金は洪爐に入るも 頻を厭わず

精眞那計受纖塵

精眞 那ぞ纖塵を受くるを計らん

蘇門果有忠臣在

蘇門 果して忠臣の在る有らば

肯放坡詩百態新

肯て坡詩百態の新に放わんや

が参照されるべきではあるまいか。遺山はここで、東坡の詩の鍛えられた美しさと、それが蘇門の誰にも繼承されなかったことを、「新」という概念をまじえながら對照的に展開したが、この第二十六首にいう「金入洪爐不厭頻 精眞那計受纖塵」とは、「爐」と「精」の縁語關係、「精眞」と「精純」の類似性が端的に示すように、「精純」とほぼ同様の内容を換言したものに他あるまい。つまり「精純」とは、東坡詩をも貫通した詩の一つの特徴であり、眞の「新」も

この「精純」なくしては生まれ得ない、詩情の鍛えられた純粹さを指すのである。

一方、「古雅」という語については、「精純」との對照を考慮するならば、やはり東坡を論じた「東坡詩雅引」（文集卷三十六）の次の文章を参照すべきではあるまいか。

五言以來、六朝の謝陶・唐の陳子昂・韋應物・柳子厚は最も風雅に近しと爲す。……近世の蘇子瞻、陶柳二家を絶愛し、極めてそれ詩の至る所、誠にまた陶柳の亞たり。然れども評者は、尙おその能く陶柳に似るも、風俗の移す所と爲らざる能わざるを以て、恨む可しと爲す。夫れ、詩は子瞻に至りてすら且つ近古たる能わざるの恨みあり。後人の望む所なし。

要約して言うならばすなわち、（東坡は「精純」「新」ではあり得たとしても）、さすがに「古」（ないし「古雅」）には容易に到達し得なかったというのである。ここにいう「古」が詩經や建安の詩に示された詩の理想を指すこと、いうまでもない。しかも、この引用と第二十六首とを参照すれば、遺山が宋詩全體をいかに考えていたかも端的に見てとれる

だろう。第二十六首・第二十八首に示された遺山の見解とは、江西詩派の人々が「古雅（詩の理想）」に到達し得なかったのはもちろん、李商隱・東坡の「精純」・「新」にも到らなかつたことをいうこと、明らかなのである。遺山の目標は、究極的には「古雅」にあつた。

そして、こうした觀點から第三首を見るならば、そこにもほぼ同様の論理を観察することが可能である。この第三首で重要なのは、杜甫と李商隱の關係がそのまま建安七子と張華の關係に置きかえられている點である。つまり、杜甫が建安の風骨の體現者であつたとすれば、張華・李商隱はその周邊で「精純」・「新」を成就した人なのである。遺山は張華を極めて高く評價した。だが張華は、『詩品』に「兒女の情多くして風雲の氣少なし」と評されたように、建安の詩風を完全に繼承した人ではなかつたのである。それと同様、李商隱も、杜甫や建安の理想をそのまま繼承發展することはできなかった。しかも李商隱は、「漢謠魏什」の世界から張華以上に遠く隔たつた、遙か後世の人であつた。彼が「漢謠魏什」の「古雅」に回歸し得ず、「兒女の

情」の如き詩風に逃避することによって、自身の抒情の「精純」を保ち、「新」を切りひらいたことは歴史的な宿命でもあつただろう。遺山は、そうした思いを第三首「風雲若恨張華少 溫李新聲奈爾何」という表現に託したのであるまいか。つまり第三首は、張華・溫李に對する「兒女の情」という誤解を正し、あわせて、詩の最盛期に生まれ得ず、特殊な詩風に向うことよつて「精純」を保つた異才の悲劇を、この三人の詩人の中に見ようとしたのではあるまいか。

したがつて、第十二首にいう「西崑」は、明らかに李商隱その人を指す。氏は、「西崑」の一語を検討して『西崑酬唱集』の詩人達を指す可能性も半ば認めておられるが、^④そうではあるまい。「鄭箋」が必要なのは、李商隱の詩が不完全だからではなく、また、遺山が李商隱を揶揄したからでもない。そうではなく、一見「兒女の情」に見える彼の詩の、「比」や「興」を眞に明らかにするためなのである。でなければ、第一句の「托」、第二句の「怨」は、^⑤一首全體に何ら貢獻しないことになるだろう。

遺山は、ここに示したと類似した論理を、「陶然集詩序」

(文集卷三十七) という文章の中で次のように展開している。

吾が飛卿(楊鴻・陶然集の著者)の追琢功夫の太過しきを病とする者あり。予、これに釋して曰わく、「詩の極

致は、以て天地を動かし、鬼神をも感ぜしむ可し。：

蓋し、秦以前は民俗醇厚にして、先王の澤を去るこ

と未だ遠からず。質の勝れば則ち野たるのみ。故に、

口を肆にして文を成し、合理を爲すを害さず。今世の

小夫賤婦、心に滿ちて發し、口を肆にして成さば、適

だ以て簡牘を汚すに足るのみ。尙お采詩の官の求取

を辱くすべけんや。故に文字以來、詩を難しと爲す。

魏晉以來、復古を難しと爲す。唐以來、規矩準繩に合

するは尤も難し。夫れ、事に因りて以て陳辭し、辭は

迫切せずして意獨り至るは、初め難しと爲さず。後世

は、難からざるを得ざるの難たり。古律歌行、篇章操

引、吟詠謳謠、詞調怨嘆と、詩の目は既に廣く、しか

も詩評詩品、詩說詩式、また讀むに勝うべからず。大

概、凡近を脱棄し、塵翳を渌雪し、聲勢を驅駕し、陣

書評

敵を破碎し、怪變を囚鎖し、幽祕を軒豁し、今古を籠

絡し、造化を移奪するを以て工と爲す。鈍滯僻澁、淺

露浮躁、狂縱淫靡、詭誕瑣碎にして、陳腐を病と爲す

も、毫髮も遺恨無し。『老去して漸く詩律に細なり』、

『佳句の法、如何』、『新詩改め罷りて自ら長吟す』、

『語、人を驚かさずんば死すとも休まじ』とは杜少陵

の語なり。『好句は仙の似く換骨に堪う、陳言は賊の

如く心を経る莫し』とは薛許昌の詩なり。『乾坤に清氣

有り、散じて詩人の脾に入る、千人萬人中、一人兩人

のみ知る』とは貫休師の語なり。『看て尋常の似きも最

も奇崛、成して容易の如きも卻て艱難』とは半山翁の

語なり。『詩律は嚴に傷えば寡恩に近し』とは唐子西の

語なり。子西また言う、『吾、它文に於いて蹇澁に至

らず。惟だ作詩のみ極めて難し。苦だ悲吟すること累

日、僅かに自から篇を成す。初め讀みし時は未だ羞ず

べき處を見ず。姑く置くの後數日、取りて讀む。便ち

瑕纇の百出するを覺ゆ。輒ち復た悲吟すること累日、

反復改定す。これを前作に比ぶれば稍や加うる有り。

後數日、復た取りて讀む。疵病復た出づ。凡そ此の如きこと數四、乃ち敢て人に示す。然れども終に工たること能わず」と。李賀の母おもえ謂らく、賀は必ず心を嘔出して乃ち已むと。過論に非ざるなり……」。

ここにあるのも、後世の詩人がいかに困難な状況にあるか、意を正確に伝えようとすればする程、辭がいかに内容から乖離して晦澁に陥ってしまうかという、李商隱論で與えられたとほぼ同様の問題であらう。詩人が意と辭の乖離にとらわれればとらわれる程、また、詩人が異才であればある程、その詩は一見「兒女」の詩に似るのかもしれない。だがそれは、ある意味で後世の異才に與えられた宿命であり、遺山の友人の中では楊鴻が、その宿命に最も忠實な詩人だったのである。

そして、李商隱に論及した三首に見られる彼の問題意識は、要約していえば、詩の理想とその歴史的衰退、ならびに衰退期における詩人のあり方という三つの要素に還元することが可能なのである。この三つの要素は、「論詩三十首」全體を俯瞰する最も重要な鍵であり、この連作の様々

な部分にあてはめることが可能である。たとえば、陳子昂を論じた第八首も決してその例外ではない。

沈宋横馳翰墨場

沈宋 横馳す 翰墨の場

風流初不廢齊梁

風流 初より齊梁を廢さず

論功若準平吳例

論功 若し平吳の例に準ずれば

合著黃金鑄子昂

合あはに黃金をして子昂を鑄すべし

この詩については、すでに翁方綱が、東坡「金門寺中見李西臺與二錢唱和四絕句、戲用其韻跋之」詩第四首

五代文章墮劫灰

五代の文章 劫灰に墮ち

昇平格力未全回

昇平 力を格いたすも未だ全回せず

故知前輩宗徐庾

故に知る 前輩は徐庾を宗とし

數首風流到玉臺

數首の風流 玉臺に到るのみなるを

との關連を指摘するという極めてすぐれた注釋を與えているが、そうした注釋をまつまでもなく、陳子昂の出現が建安の理想への回歸をもたらし、それが唐詩の眞のはじまりを告げたことを論じること、明らかである。氏の見解も全く同様であるが、ただ氏は、翁方綱の指摘の眞の意味（つまり、唐初と宋初の歴史的なアナロジー）を完全に理解し

ておられるようには思えない。

また、第十六首

切切秋蟲萬古情

切切たる秋蟲 萬古の情

燈前山鬼淚縱橫

燈前の山鬼 淚縱橫たり

鑑湖春好無人賦

鑑湖の春は好^{ちよ}しきも人の賦す無し

夾岸桃花錦浪生

夾岸の桃花 錦浪を生ず

は、前半の秋と後半の春とを對照することによって、辭の

晦澁に苦惱する詩人像と、李白に代表される詩の理想とが

象徴的に示されたものであらう。氏は、李賀論という傳統

的解釋に従っておられ、私もその點に特に異議はないが、

ただ、李賀の模倣者に對する否定的な論とする氏の説には

容易に承服しかねるものがある。なぜなら、遺山が「萬古」

を否定的な意味で使う筈はなく、第一句・第二句で論點が

かわったとも思えないからである。また、春と秋とが對照

された意圖については、「太白仙才・長吉鬼才」という宋人

の言以上⑧に積極的な理由が用意される必要があるだろう。

また、柳宗元を論じた第二十首

謝客風容映古今

謝客の風容 古今に映ず

書 評

發源誰似柳州深 發源 誰か柳州の深きに似ん

朱紘一拂遺音在 朱紘一拂 遺音在り

却是當年寂寞心 却是是れ 當年寂寞の心

は、意の「精純」(すなわち「發源」の深さ)こそが、「古

雅」(すなわち「遺音」)に到る最大の道であること、「救

勒の歌」を論じた第七首

中州萬古英雄氣 中州萬古英雄の氣

也到陰山敕勒川 也^もた 陰山敕勒川に到る

は、建安の風骨が陰山に到ったこと、陸龜蒙を論じた第十

九首

萬古幽人在潤阿 萬古の幽人 潤阿に在り

百年孤憤竟如何 百年の孤憤 竟に如何

は、衰退期の詩人の宿命の何たるかを、それぞれ論じるも

のと考えられる。

このほか、こうした觀點から論じられる詩は三十首中に

數多く含まれるが、より重要なことは、こうした作業を通

じて、遺山の文學史觀そのものを明らかにし、あわせて、

自身の時代とその役割を彼がどのように認識していたかを

明らかにすることではあるまいか。氏の敘述には、そうした觀點が稀薄に思われてならないが、それは私の思い違いであろうか。

遺山は、金朝に到る詩の歴史を次のように見ていたのである。まず、詩の歴史は「漢謠魏什」によってはじまる（第一首）。晉代に到って陶淵明等のすぐれた詩人を生みながら（第四首）、歴史全體は衰退期にむかい（第三首）、詩の理想は北上して中原をはなれ、陰山に到るのである（第七首）。六朝の衰退期の中、詩の理想はやがて南下し、陳子昂を生む（第八首）。その後、杜甫（第十首）・李白（第十五首）・韓愈（第十八首）・柳宗元（第二十首）といった繼承者を輩出するが、詩はまた衰退期をむかえ、李商隱（第十二首）・李賀（第十六首）・陸龜蒙（第十九首）といった晦澁の異才を生むことになるのである。こうして五代の衰退期を経て、やがて宋代をむかえることになるが、第二十二首で

只知詩到蘇黃盡 只だ知る 詩は蘇黃に到りて盡くと

滄海橫流却是誰 滄海橫流 却是是れ誰ならん

というように、遺山は、東坡・山谷が一定の役割を果した

後、文學史は「滄海橫流」の状況にはいったと考えたのである。彼が江西詩派に極めて冷淡であつたこと、すでに氏の説くとおりである。

では、遺山は、金朝詩についてはどう考えていたのであろう。

もちろん彼は、「論詩三十首」の中で同時代に直接言及することは、終にしなかつた。だがそのことが、この連作の性格を大きく規定しているかといえ、實はそうでない。遺山がここで展開したのは、文學史全體を概觀し、作詩上の様々な問題を整理することによって、あくまで自身の道を摸索することだったのである。彼が同時代に直接言及しなかつたのは、過去を概觀し焦點を他に向けることによって、より自由に發言するためだったのである。

彼は、「論詩三十首」の續篇ともいえる「自題中州集後」という作品の中で、同時代を暗示しながら

鄴下曹劉氣儘豪 鄴下の曹劉 氣は儘に豪はしきま

江東諸謝韻尤高 江東の諸謝 韻は尤も高し

若從華實評詩品 若し華と實とに従りて詩品を評せば

未便吳儂得錦袍

未た便らずしも 吳儂は錦袍を得し

と述べている。この言を信じれば、建安に發する詩の理想は、「滄海橫流」の中、金朝詩によって復興されたことになるだろう。確かに、金朝詩の特徴は、南宋のそれに比較すれば、素朴さを宗とする。だがそれが、建安の風骨と同質であるか、また、遺山が眞に同質と考えたかは、全く別問題である。文學史についてあれ程正しい認識を示し、自身の作品にたゆまぬ推敲を重ね、一作ごとに何かしら彫琢を凝らして駄作をほとんど残さなかった遺山が、つまり、きびしい自己規制と正確な批評眼を自身に課し、常に極めて意識的な記述者であり續けた遺山が、金朝詩こそ建安詩の後繼者だと本當に考えただろうか。「陶然集詩序」において、後世の詩人の運命をあれ程執拗に論じた遺山が、北宋の詩業と金朝の詩業とを比較してもなお、「錦袍」を手にし得ると考えただろうか。そのことについて、ここでの詳論は必要あるまいが、ただ一つ附言しておくならば、「論詩三十首」を書くことによって、遺山は、建安への回歸の道を自身と同時代に課したのであり、そう提唱するこ

書評

とによって、彼の時代の文學の變革を期待したのである。ここにこめられた意圖の深さ、表現の多義性、ないし巧妙さは、氏の予想を遙かに上廻るものでなかったらうか。

本書評は、本書を京都大學文學部に寄贈された氏への返禮をかねる。私がその任でなかったことは氏の寛諒を乞ねばならないが、一つ蛇足を加えさせていただくなら、私ははじめから氏に挑戦するつもりで本書を讀んだ。なぜなら、私の妄言にかかわらず本書の價值はやがて衆目の認める所となろう、とすれば、私はことさら本書の長所を言う必要はなく、むしろ氏の嘲笑を覺悟で異論を提出することこそ、氏の誠實さに應^{こた}える唯一の誠實さだと考えたからである。はじめにも書いたとおり、私はこの作品にあまり愛着を感じない。そうした私の思いが本書評に影響した點があればお詫びしたい。遺山の傑作は他にも數多くある。それら多くの傑作を、本書と同様の誠實さをもって氏が論じられることを期待し、また、その日の遠からずおとずれることを信じつつ、筆を擱く。

注

- ① 拙稿「元好問『論詩三十首』とその周邊」(日本中國學會報・第三十七集所收) 参照。
- ② 小栗英一氏『元好問』(岩波書店・中國詩人選集二集) 27頁 参照。
- ③ 『中州集』卷九・擬初先生王中立の條参照。
- ④ 本書104頁に、氏は次のようにいう。

Yuan tells us in Line Three that poets generally love the fine quality of 'Hsi-k'un' 西崑 verse. There are two ways of interpreting this line. One is to understand 'Hsi-k'un' as referring to the poetry of early Sung 'Hsi-k'un style' writers like Yang I (947-1020) 楊億, Ch'ien Wei-yen (fl. 1016) 錢惟演, and Liu Yun (fl. 1016) 劉筠, who imitated the verse of Li Shang-yin and Wen T'ing-yun (812-870). Their work, collected together by Yang I in the *Hsi-k'un ch'ou-ch'ang chi* 西崑酬唱集, is what is usually understood by the term. (The term 'Hsi-k'un' itself refers to the K'un-lun mountains in the West, with the association that they are the far-away home of Taoist transcendents.) Taking 'Hsi-k'un' in the above sense, Lines Three and Four would mean:

Most poets like Hsi-k'un poetry [which is imitative

of Li Shang-yin's language, of the sort found in Lines One & Two],

But you need a genius like Cheng Hsuan to make sense of it.

Yuan's poem would be understood to be a critique of early Sung Hsi-k'un style poetry; as such, it should be considered together with his criticism of that period's poetry expressed in Poem 28, as well as in Poem 22.

ただし、氏自身は「西崑」が李商隱を指すという説に傾いていることを、付言しておく。

- ⑤ 氏は、李商隱「錦瑟」詩の理解のし方について、様々の説を紹介しているが、そうした作業は、少なくとも第十二首を考える上では無意味であろう。「錦瑟」は、李商隱を論じるところを明示するためと、「托」・「怨」の二語を導くために引用されたのではあるまいか。
- ⑥ 第十六首第四句「來岸桃花錦浪生」は、氏も指摘する通り李白「鸚鵡洲」詩の一句を用いるものである。
- ⑦ 氏は104頁・103頁に次のようにいう。

Li Ho, according to Yuan in Poem 16, was able to express sad, eternal sentiments (Line One), even when writing lines about lampside, tearladen mountain ghosts (Line Two). But among later writers given to imitating Li Ho's unusual diction and strange imagery (like that

of Line Two), is there no one to write about the real, external world portrayed so admirably in Li Po's verse (Lines Three and Four)?

It appears that Yuan Hao-wen finds Li Ho's unique contribution to poetry acceptable. Yet, as with the poetry of Lu T'ung (Poem 13), he seems dismayed at its influence on later poetry. Rather than pursue strange imagery and diction for their own sake (Poem 22), poets of more recent times would do better to emulate the more natural imagery of Li Po and Tu Fu, derived from direct experience, and described in this poem and in Poem 11.

⑧ 本書以頁參照。

(聖手門學院大學 高橋文治)